人間ジオ宝

Daichi Kohmoto
河本　大地
奈良教育大学 社会科教育講座 地理学研究室

絵 Hasuka Kawashima
川島　蓮香

人間ジオ宝

奈良教育大学　社会科教育講座　地理学研究室　河本 大地
（絵：川島 蓮香）

１．ジオの世界へようこそ

「どんなに恐ろしい武器を持っても、たくさんのかわいそうなロボットを操っても、土から離れては生きられないのよ！」

スタジオジブリの映画『天空の城ラピュタ』で、ヒロインのシータは言いました。

土を含む､人間や他の生きものの基盤になっている自然のことを､｢ジオ(geo)｣といいます。具体的には、土壌や、地形や、地質や、岩石や、水や、雪氷や、気候･気象などのこと。ジオを大地と訳すこともあります。ジオという言葉は、学問分野で言うと、地理学（geography）、地質学（geology）、地形学（geomorphology）、地球化学（geochemistry）、幾何学（geometry）などの接頭語として使われています。最近は、ジオについて楽しくわかりやすく見せようとする地域であるジオパーク（geopark）も世界各地に増えています。

私たち人間や他の生きものは、ジオの上や、ジオの中で暮らしています。そこには地域多様性があります。次のページの絵を見てみましょう。

豪雪地域の暮らしがあります。斜面に張り付いた集落と棚田のある山あいの暮らしがあります｡熱帯雨林などの自然を必死に守り続けてくれる人がいます。汗を流して鉱物や岩石を掘り出す暮らしがあります。平野や盆地の地形を活用した田畑や町があります。ほとんど雨の降らない砂漠を横切って荷物を運ぶ暮らしがあります。命がけで漁をして新鮮な魚をとり続けてくれる人がいます。

気候風土や地形といった「ジオ」に適合した生活文化が、それぞれの土地に息づいています。

２．「人間ジオ宝」って何？

「人間ジオ宝」は、その地の気候風土や地形といった「ジオ」に適合した生活文化を、さまざまな工夫をしながら形作ってきた人のことです。私の造語です。なぜここに「宝」という文字が入っているのでしょうか？　ここで人間国宝という言葉を思い浮かべた人は、勘がいいですね。

人間国宝は、重要無形文化財保持者の通称で、国がひとりひとりを認定して

います。芸能（雅楽、能楽、文楽、歌舞伎、組踊、音楽、舞踊、演芸）分野と、工芸技術（陶芸、染織、漆芸、金工、金工（刀剣）、人形、木竹工、諸工芸、和紙）分野が対象です。この方々には、国が年額 200 万円の特別助成金を交付しています。

「人間ジオ宝」には、そんな制度はありません。人間国宝と同様に説明するなら、「ジオ」の影響を暮らしの中に顕著に保持してきた人の通称です。認定するのはみなさんです。地形・地質といった「ジオ」と顕著に結びついた生活文化（山の暮らし、海の暮らし、川と結びついた暮らし、鉱山のある暮らし、甚大な被災の経験者の暮らしなど）が対象で、風土や暮らし、それらが織りなす「地域多様性」を生きざまとして見せることができる、その地ならではの生活文化版人間国宝のような存在です。その生きざまは、地形・地質をはじめとする「ジオ」と、その上で成り立っている生態系に大きな影響を受けて培われてきました。

しかし、「ジオ」を基盤とした人々の暮らしや風土のありよう、地域多様性は薄れてきています。次章からは、具体的な例を見ていきましょう。

３．小代（おじろ）って？

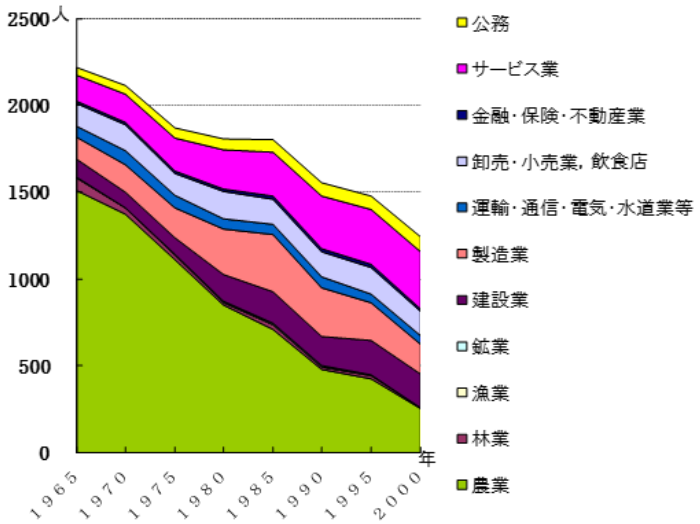
私がご縁をいただいて 2008 年から通い続けている地域があります。その名は 小代（おじろ）。兵庫県北部（但馬（たじま） 地方）の鳥取県境にある山間地域です。住所表記は、美方郡（みかたぐん） 香美町（かみちょう） 小代区（おじろく）。2005 年に 3 つの町が合併して香美町ができる前は、美方町（みかたちょう） だったエリアです。合併の際、住民の要望により、難読だけれども美方よりも古くから用いられてきた「小代」という地名を復活させました。

小代という地名は、小さな田を意味します。小代には、地すべり地を活かした棚田が発達し

ており、日本の棚田百選のひとつである「うへ山の棚田」もあります（左の写真）。こうした棚田等で用いられてきた農耕牛の「但馬牛（たじまうし）」が、1960年頃まではほぼすべての家で1頭ずつ飼われていました。現在の但馬牛は食肉用ですが、ここでは多くの牛飼いさんは繁殖農家。子牛の段階まで育てて競りに出します。牛飼いの数は減っていますが、小代はすごいんです。全国の黒毛和牛のほとんどすべてにその血の入っている「田尻」号という名牛を育むなどした、和牛のルーツとも言える地域なのです。これについては後述します。

小代の人々は、どのようにして生計を立ててきたのでしょうか。下の図は、国勢調査に示された美方町時代の産業大分類別就業者数の推移です。1960年代までは米作や畜産といった農業が中心でした。しかし小代では冬は豪雪で田畑を耕すのが困難でした。そこで冬には働き盛りの男性の多くが、兵庫県南部や奈良県、愛知県等でお酒を造る杜氏（とうじ）などの出稼ぎをしていました。現在は、近隣に通勤したり、スキー場で冬だけ働いたりといった形に代わってきています。主な収入源はサービス業・建設業・製造業などに移りました。とはいえ多くの方々が、昔も今も複数の収入源を組み合わせて生活しています。

しかし、過疎化・高齢化は顕著です。香美町が2010年の地区別年齢5歳階級別人口をもとに推計したデータによると、2015年の小代の人口は1,957人で、65歳以上の割合を示す高齢化率は44.8%。香美町全体では人口18,252人、高齢化率36.1%です。



小代は大きな観光地ではありませんが、スキー場（おじろスキー場・ミカタ

スノーパーク）のほか、温泉「おじろん」、滝や渓谷、キャンプ場・コテージ村などに多くの来訪者があります。また、美方町時代に姉妹都市縁組が結ばれた尼崎市の施設である美方高原自然の家「とちのき村」にも、小学生や親子連れが多く訪れています。但馬牛以外の特産品として、温泉水を活用したスッポン・チョウザメの養殖がおこなわれています。また、棚田米や、小代が原産地の在来種である美方わさびや美方大納言小豆、シカ肉やイノシシ肉などのジビエ、各種山菜、渓流の川魚なども挙げられます。

４．田渕徳左衛門さんと熱田

ではここで、小代の「人間ジオ宝」の中からおひとりを紹介しましょう。その名は田渕徳左衛門さん。1929 年に小代の熱田という集落にお生まれになりました。今、ここは人の住んでいない集落（無住集落、廃村とも呼ばれます）になっています。

熱田は、小代の中心部から直線距離で 7.5km の源流部に位置する緩斜面にあります。12 世紀の終わり頃、名古屋の熱田神宮の大宮司の次男が事情により逃げてきて、ここを開拓し住み始めました。したがってここには今も熱田神宮の流れをくむ熱田神社があります。熱田の人々は、家の周りで自給自足の暮らしをするため、ずっと 9 軒くらいの数を保ってきました。学校からあまりに遠かったので、家庭教育所を住民の手で開設し、後にそれは小学校の分校として認められました。校舎（次のページの写真。2011 年 5 月撮影）は、資材を下から運ぶことが難しかったので、徳左衛門さんら住民の手で立派な木を伐って提供されたものでした。渓谷に沿って自動車の通れる道路の整備が始まったのは 1949 年。村の人みんなで苦労して建設していったそうです。それまでは、山の上を歩く道がメインルート。渓谷沿いに小代の中心部へと向かう道は、県道だったとはいえ、1 人が歩けるだけの幅の箇所がた

くさんありました。岩盤にはしごをかけて上らなければならない箇所もありました。生活の糧である牛を売りにいくのも大変でした。関西電力による電気の供給は 1962 年から。それまでは、住民はランプとカンテラを使っていました。自分で小規模水力発電の設備をつくって 10 年ほど使用し続けた人もいました。

しかし、町に買い物に出かけた女性たちが帰りに雪崩に遭うという事故があり、1969 年には住民の依頼で美方町が越冬住宅を、小代の中心部に近い野間谷に建設しました。そして、熱田の住民みんなが一時的に引っ越しました。その時は、春になったらみんなで熱田に帰る予定でしたが、子どもたちは越冬住宅の近くにある小学校でできた新しい友達と別れたくなくなりました。そこで結局、年間を通じて越冬住宅でみなさん暮らしながら、農林業や祭、墓参り等のために熱田に通い続ける生活になりました。しかし、もともとの熱田の土地にこだわる若い人は、だんだんと減っていきました。高齢化が進み、熱田が大好きな方々も通うのが難しくなりました。熱田に残された家々は、積雪等により相次いで崩壊してしまいました。田畑を耕すことも少なくなり、跡地に植えた杉の木々は大きくなり、すっかり熱田の風景は変わりました。

徳左衛門さんは、そんな熱田で 2009 年まで但馬牛を飼い続けてきました。ここでは、厳しい気候風土ゆえに身体の引き締まった牛が育ち、以前は熱田の牛と言うと非常に高く売れたそうです。夏場は集落の中で放し飼い。熱田の草を食みながら、牛はのびのびと育ちました。冬場は、越冬住宅ができてからはその近くで飼っていました。春と秋には、10km 以上の道のりを徳左衛門さんと牛たちが大移動する光景が見られました。

徳左衛門さんは、大阪等の自然学校や英語キャンプの受け入れにも積極的でした。小学校 1 年生の頃に熱田の徳左衛門さん宅で民泊を経験した伊丹の方が、大人になってからあれはどこだったんだろうと思って探し出し、今も毎月のように熱田をはじめとする小代に通っています。2015 年には、自然学校に参加し

た有志が、熱田の人々への感謝の気持ちから熱田神社の鳥居を造り替えました。

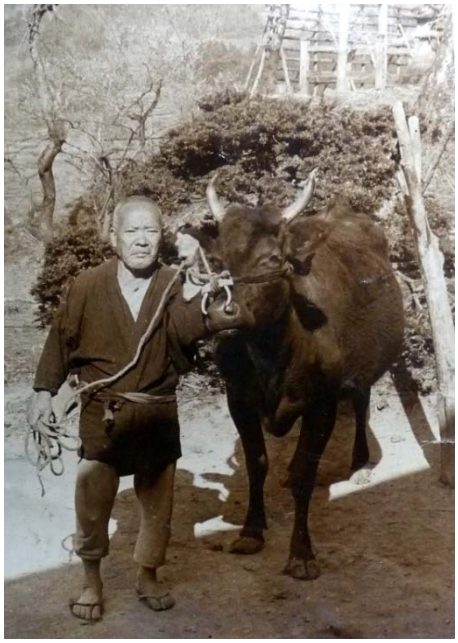
ほかにも、熱田や但馬牛に興味を持った人を案内したり、熱田の暮らしの語り部になったり、道を守るべく行政に働きかけたり、自分たちの手で道や建物を直したり…。たくさんの人が、徳左衛門さんを通じて熱田に触れてきました。

上の写真は、熱田の田渕徳左衛門さん旧宅。2009年5月に撮影したものです。

５．但馬牛（たじまうし）の農家さんの暮らし

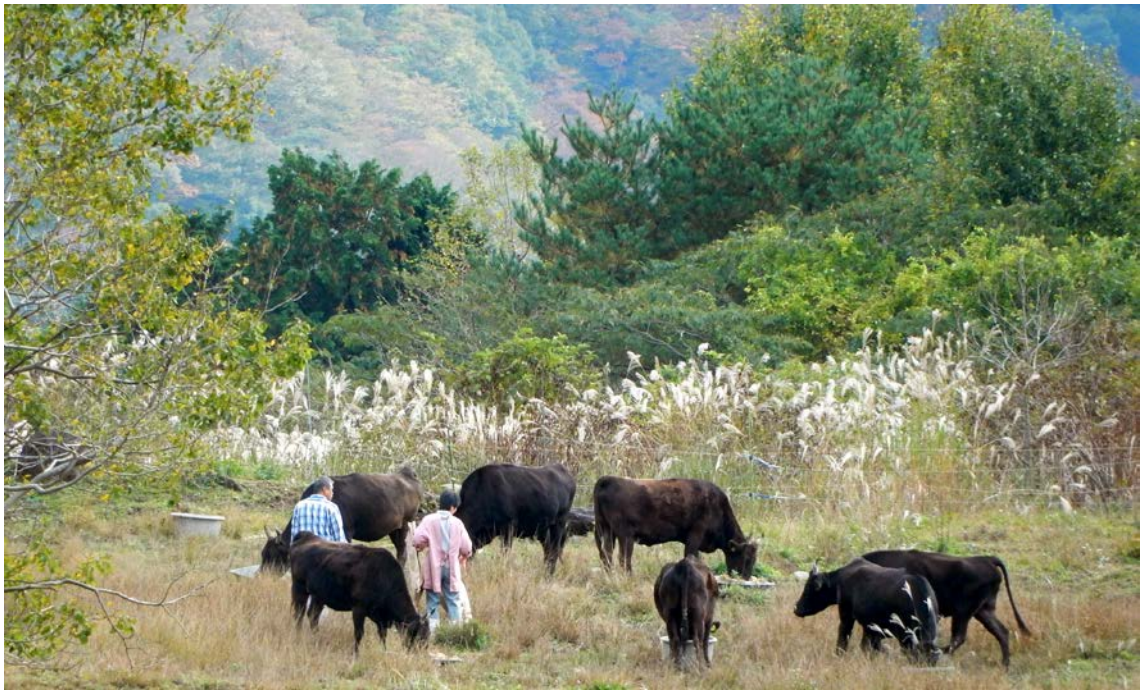
99.9%。なんだかすごい数字でしょう。

小代は「和牛のふるさと」。全国の黒毛和牛の99.9%以上に、小代で生まれ育った但馬牛の血が流れています。この数字は、2012年に小代観光協会が美方郡和牛育種組合を通じて社団法人全国和牛登録協会に「田尻（たじり）」号という牛の血統に関する調査を依頼し、明らかになりました。「田尻」号は、小代の貫田（ぬきだ）集落の田尻松蔵（たじりまつぞう）さん（写真は香美町小代観光協会所蔵）が育んだ牛で、1939年から1958年まで生き、優れた種雄牛として全国の和牛改良の礎を築きました。それに先立つ江戸時代末期には、小代の猪之谷（いのたに）集落の前田周助（まえだしゅうすけ）さんが、少しでも小代の谷の人々の暮らしをよくしようと、但馬牛の優れた特徴を受け継いでいくための基礎となる「周助蔓」を形づくりました。蔓（つる）というのは、似通った形質をもつ優れた血統の雌牛の集団です。小代周辺は地形が険しく、牛を連れての山越えは難しかったので、谷ごとに質の高い蔓が育まれました。明治初期に起きた但馬牛の絶滅危機を救ったのも小代の牛です。当時、黒毛和牛を大型化するために政策的に欧米の



品種との交配が行われましたが、よい結果が得られず、病気がちな牛や気性の荒い牛が増えてしまいました。そこで純粋な但馬牛を探したところ、先述の熱田集落に4頭だけ残っていたそうです。「田尻」号は、その血統を引く「あつた蔓」のうちの1頭でした。神戸ビーフ、松阪牛、近江牛、飛騨牛、前沢牛、宮崎牛、佐賀牛、米沢牛…。各地でブランド化されている黒毛和牛は、小代の地と人々が育んだこの偉大なる血統あってのものなのです。

現在、世界の畜産の主流は、少数の畜産農家が多くの頭数を飼う多頭飼育です。数百頭規模の経営も増えています。そうした中、小代ではまだ2頭や10頭くらいの規模で牛を飼う農家も見られます。棚田の畔で刈り取った草を中心に、自給飼料 100%を維持している農家もあります。こうした畜産農家には、全国的に希少性を増している、「小さいからこその価値」が見られます。小代の畜産農家は、家族での小規模経営だからこそ１頭１頭の牛のことを本当よく理解して世話しているし、牛も飼い主のことをよく知っています。ここでは、「よい肉をつくる」だけでなく、その大前提である「よい牛を育む」ことが、毎日の暮らしの中でとても大事にされてきました。



６．新たなる「人間ジオ宝」が続々と…

小代には、山菜採りの名人がいます。名うての猟師や漁師がいます。保存食づくりの達人がいます。鹿肉などのジビエ料理を工夫する人がいます。山で仕留めたイノシシを丸焼きにして楽しませる人がいます。地元の物語を方言とユーモアあふれる劇にして上演する女性劇団があります。村芝居で人々を楽しませる芸達者がいます。地域の魅力の伝え方を工夫するデザイナーさんがいます。U ターン起業で地域の方々に慕われる庭師さんがいます。除雪の技術がピカイチのおじさんがいます。ここに生きるひとりひとりの話しを丁寧に聞きながら、みんなの健康と尊厳を守る看護師さんがいます。それぞれの家の味や料理を受け継ぐ人もいます。この地で牛を飼うことに誇りを持ち、今後の社会を見据えた牛の育て方を工夫する夫妻がいます。小さい頃から近所の但馬牛農家をよく手伝い、絵の宿題ではいつも但馬牛１頭１頭を描き分けていた若者がいます。休日に力を合わせて自分たちで道や水路を直すサラリーマンがいます。川が大好きで、遊び場としての川の地形や魚の居場所を知り尽くした子どもたちがいます。そして、そんなこの地の魅力を伝えようと工夫する小代ガイドクラブのみなさんも（写真は 2015 年 9 月、ジオパークの国際会議の際に撮影）。

小代は「人間ジオ宝」とその卵や雛に満ちています。でも、みなさんの周りにも旅先にも、また違った「人間ジオ宝」がおられるはず。その土地その土地の「人間ジオ宝」に会いに行きましょう。今だけ、ここだけ、この人だけの存在。そこにはきっと、あなたの未来、社会の未来のヒントがありますよ。

７．おわりに

地球上の土地は、場所によって特性が異なります。人類はこれまで、それぞれの置かれた土地の自然環境を読み解き、その特性の活かし方、克服の仕方を工夫しながら懸命に暮らしてきました。いろんな知恵や知識、技術が、そこから生まれてきました。それが、地域の多様性、文化の多様性を形づくってきました。

しかしそんな多様性の中には、私たちの多くが非効率的で不便と感じることもあります。公平性を欠いていたり、教育や保健の問題が指摘されたりすることもあります。社会経済は地球全体で急速に移り変わっています。とはいえ「人間ジオ宝」たちはその中で、何もかもを与えられなくても生きていく野性の力を見せてくれます。その地の自然に即して生きる姿を見せてくれます。

人と自然の関係、人と人の関係には、常に「折り合い」が必要。「人間ジオ宝」は、そんな「折り合い」の結晶です。その地その地の特性に見合った暮らしを営む「人間ジオ宝」は、これまでも、これからも、人類の宝です。

河本 大地（Daichi Kohmoto）

岡山の建部町出身。
2007 年に広島大学大学院文学研究科博士課程後期修了。
博士（文学）。神戸 夙川（しゅくがわ）学院大学観光文化学部の講師および准教授を経て、2015 年から奈良教育大学准教授。地理学、世界・日本の農山村地域研究、観光・地域振興、ESD。

【研究テーマ】

地域多様性をいかした社会づくりに関心を持ち、地域づくり、観光、ジオパーク、有機農業、ESD（持続可能な開発のための教育、持続発展教育）などに関する実践的な研究活動を行っています。

【著者の自己紹介】

－趣味

人や風景に出会いに、地図を持って歩き回ること。

－今までに訪ねた中でオススメの場所

小代、奈良県南部などの山村、ヒマラヤ山脈南側の山村、スリランカの茶園地域、ソブラルベジオパーク（スペインのピレネー山脈）、三陸海岸、中国雲南省の棚田群、チュニジアのマトマータ（洞穴住居群）、ガンジス川の源流・・・

－座右の銘

“やってやれない ことはない。やらずにできる わけがない。
今やらずして いつできる。わしがやらねば だれがやる。”
by 彫刻家・平櫛田中

絵：川島 蓮香（Hasuka Kawashima）

写真と絵描きが趣味。
2014 年、神戸夙川学院大学観光文化学部を卒業後、カメラスタジオに勤務。兵庫県赤穂郡 上郡（かみごおり） 町（ちょう） 在住。猫好き、寺好き、冒険好き。

人間ジオ宝

著者　河本（こうもと） 大地（だいち）
2016 年 2 月 29 日 第 1 版
奈良教育大学出版会
〒630-8528
奈良市高畑町
TEL: 0742 (27) 9135　FAX: 0742 (27) 9147
E-mail: g-kenkyu@nara-edu.ac.jp
URL: http://www.nara-edu.ac.jp/PRESS/